

日本百街道紀行

街道とまちづくり

第36回

白ヶ峰往来

「人・自然・食を未来につなぐ 交流都市 ひみ」を目指して

氷見市長(富山県)

林 正之



はじめに

晴天の日、富山県西部、能登半島の付け根に位置する氷見市からは、晴れた日には「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟する富山湾越しに、標高3000m級の立山連峰の雄々しい景観を望むことができる。



富山湾越しに見える立山連峰

古代、富山湾に前面し、背後に「布勢の海水」に面して海・水産物が豊富に採取できたことから生活に適した土地柄であったと思われ、また文化財としては、国内で初めて炉を持つ住居跡が発見された朝日貝塚や、同じく初めて洞窟遺跡の発掘調査が行われた大境洞窟住居跡、日本海側最大の前方後方墳である柳田布尾山古墳があり、それぞれ国史跡に指定されている。

新時代の「令和」の典拠となった万葉集にも登場する「布勢の海水」は、越中の国守であった大伴家持が船を浮かべて歌を詠んだ湖とされ、万葉集には氷見に関する歌二十九首が収められている。

当地は、越中と能登との国境にあったことから、戦国の頃に前田

慶次ゆかりの阿尾城が築かれるなど軍事的な重要拠点であったが、江戸時代に入り、加賀藩が越中・加賀・能登を領土としたため能登との結びつきは強まった。

氷見の名の由来

火見(狼煙の監視や漁火を見る)、干海(海が干上がった陸となった)、比美(家持が海を「比美乃江」と詠んだ)、日見(海から昇る朝日を見る)、氷見(海越に立山の山頂の水を見る)など諸説あつて正式な由来は判然としないが、いずれもロマンを感じさせるものとなっている。

食都 ひみ

氷見を語る上で、今「食」の分野は欠かせない。



活気あふれるひみ寒ぶりの祭り風景

「ひみ寒ぶり」や「氷見牛」などブランド力のある食材や、日本三大手延べうどんに数えられる「氷見うどん」、「稲積梅」などの加工品、それらを生かした春夏秋冬の氷見三昧御膳等の料理メニューなど、氷見の恵まれた風土が豊かな食文化を育んできた。その豊かな食文化の継承、食を核とした産業の振



湊橋にかかる忍者ハットリくんからくり時計

©藤子スタジオ

「ひみ番屋街」に代表される観光交流のみならず、「春の全国中学生食のテーマパークである道の駅を目指す都市像を「人 自然 食を未来につなぐ交流都市 ひみ」としている。

興、地産地消の促進、ひみブランドの強化と創造、さまざまなテーマ・シーンで市民や事業者の活発な活動が展開されている。「ひみ食彩まつり」は、そんな氷見ならではの味を一堂に集めた食のイベントとして多くの来訪者を集めている。

未来につなぐ交流都市

氷見市では、総合計画における

目指す都市像を「人 自然 食を

未来につなぐ交流都市 ひみ」と

している。

食のテーマパークである道の駅

「ひみ番屋街」に代表される観光交

流のみならず、「春の全国中学生

ハンドボール大会」にみるスポーツ交流、「氷見市潮風ギャラリー（藤子不二雄[Ⓐ]アートコレクション）」に代表されるまんがを生かしたまちづくりなど、氷見らしさをあらゆる形で発信し、市内外のあらゆる人々に氷見の良さを理解してもらえよう取り組んでいるところである。

新旧の街道

全ての交流の基盤となるのは、やはり道である。

古代からの官道北陸道の路線を継承し前田家の参勤交代路であった「北陸街道」は、現代の北陸自動車道と同じく、氷見市から外れた場所を通っていた。

そのような状況下、古くは氷見市と石川県宝達志水町を結ぶ「白ヶ峰往来」が北陸街道のバイパス的な形で越中と能登を結ぶ要路となっていた。「白ヶ峰往来」は「志乎路」とも呼ばれ、大伴家持が能登巡行の際に歌を詠み、木曾義仲が駆け抜け、親鸞が越後流刑の際に通ったとされる歴史を刻んだ道でもある。各所に家持の歌碑が設置されるなど、今も当時の風情を肌で感じることが出来る。その一

部は文化庁「歴史の道100選」に選定されており、毎年「白ヶ峰往来ウォーク」という歴史の道をたどるウォーキング大会が開催されている。

現代では市の南北を縦断する能越自動車道や、東西に横断する国道415号が街道としての役割を担っている。

道路を持つ人・物の流れを支える社会基盤としての重要性は、昔も今も変わらないが、現代の街道

はその趣よりも機能が重視され、より安全で快適な時間・空間の提供が求められる。

道路の利便性の向上は交流都市氷見の大きな財産となるものであり、平成から令和へと時代が変わる中、交流都市としてさらにステップアップするためのタイミングと捉え、これまで以上に美しい景観や多彩な食文化などの「氷見らしさ」を磨き上げ、広く発信していきたい。

白ヶ峰往来

一口メモ

奈良・平安時代以来の官道

白ヶ峰往来は、古来、越中国と能登国をつなぐ幹線道であり、中央と結ぶ公道であった。

現在の氷見市「日名田」から石川県宝達志水町「下石」に至る古道である。



江戸時代に、将軍の代替わりにあたり地方を巡視した幕府の巡見使一行が通行したことから、「御上使往来」とも呼ばれている。

日名田には日名田関所の跡があり、路傍には今も地蔵などの石仏が残る。

企画協力：全国街道交流会議「街道交流首長会」